フィリッピン慰霊友好親善訪問に参加して　　沼津市遺族会　宮島信明

2008年11月28日から12月3日にかけて政府、日本遺族会のご支援により、フィリッピン慰霊友好親善訪問団の一員として、フィリッピンルソン島クラークへ巡拝に行きました。総勢150名の団体、我々C班29名、静岡県からは4名。全ての参加者が戦争遺児で、戦争で父親を亡くし、戦後の混乱期を歯を食いしばり苦難に耐えて生き抜いてきた者です。国民の全てが生活に苦しくて、一家の大黒柱の父を戦争で失った母も両親と共に戦後の復興に頑張って生きてきました。太平洋戦争ではフィリッピンで50万人以上の戦死者と、100万人以上の遺児をつくったのです。私共は「おとうさん」という言葉を一度も言えず、苦しい生活と戦ってきました。

フィリッピンルソン島での兵士との戦争の話を聞くにつけ、見るにつけ、戦争といえるようなものではありませんでした。戦艦・戦闘機もない我が陸海空軍兵士に対し、アメリカ軍は、おびただしい戦艦・飛行機・戦車・ブルドーザー等の鉄の固まりで攻撃を仕掛け、陸軍の混合部隊50万人は、広い海岸、平原で逃げる所もなく、神風特攻隊の精神で全員戦死したとのことです。真実の話を聞き、唯、涙が止まりませんでした。特に、マッカーサーの指令により、「日本人は一人も生かしておくな。」との事。最前線にはフィリッピン人を立て戦い、フィリッピン人111万人が死んだとのことです。我が国は戦争に負け、武器も持たない軍人50万人をも犬死させ、何の意義もありません。日本国領土に上陸させないための戦い。懐かしい故郷、父母、妻子の事を思い散っていった父・勇士たち、唯、無念だったことかと思い、涙涙の一日でした。

クラーク基地の中のホテルにてようやく父に会うことができました。「お父さん、きっとまた会いに来るからね。」心に誓いながら、最後に、参列者全員で歌「故郷」と「海ゆかば」を合唱して帰路につきました。

戦争は、起こすはたやすく、終わらせるはむずかしいといいます。結果は得られず、戦争は絶対あってはいけないことを父達は死をもって訴えたのです。日本の方向を正したのです。フィリッピンの広い原野に眠り続け、日本の平和を望んでいるのです。私達も、その意志を受け、後世に残したいと思います。

（平成23年沼津市遺族会発行「戦争と平和」より）